

●高澤良一 第四句集 ぱらりとせ

●冬

齊病床空想二句の國響郡の俎村

箸つけて雑煮ヶ浦の煤け餅

熱爛をすすむるときの汝が声音

爛熱し日和見主義をとちめむ

熱爛にてやんでえばかやろめが

すこたんのへったくれのと爛熱し

其の段になると熱爛ほすばかり

着膨れてゐてはごたつく句ばかり出来

着膨れて心臓外科に繋がれぬ

強く吹く日なりその分厚着せり

鮫鱧煮え巧言令色鮮矣仁

風響くなり氷瀑の大伽藍カテドラ

一月の風に飛び散る雨の粒

冷え込んだまま一葉忌暮れにけり

いざこざのなき隔たりに浮寝鳥

兎出づ村に小さな浅間さんせんげん

先口の鴨南蛮かもなん忘れ居らぬかや

松ぼくり大年の日を懐かしみ

水面の落葉も日差し受けながら

青き葉も意気のがらぬ落葉焚

タンバリンもって木の葉は舞はずべし

落葉の灰風に壊れて仕舞ひけり

おでん酒当を得ているその見方

高飛車に決め付けらるおでん酒

昼からの余りある日や枇杷の花

枇杷の花われらかうしてまた会へて

二度咲きの一つこつきり小米花

ごたごたがやつと片付き帰り花  
枯柏風打ち勝って飛ばしけり  
枯柏つひに強情通しけり  
がさ市の風素つとんで来たりけり  
風花に取り込み忘る男物  
聖護院かぶらな漬の送りどき  
水切りてキューピーの頭の赤蕪  
紙を漉く技も曾ての武蔵紙  
風上へリズムをとりにて鴨の首  
割り込ませてもらひますよと鴨のこゑ  
首猶も前へ前へと鴨助走  
派手好きな鴨の二三羽交じりゐし  
鴨の水ばかりとらへて遠眼鏡  
鴨の首振って大きな波を越ゆ  
すがれたる蔓の蔓打つ空つ風  
枯るる頭を潜望鏡のやうにリス  
枯蔓の零し損ねし実の二三  
枯蔓の乱脈透きて日の差せり  
枯木打ち晦日の雨の至りけり  
枯木越し円空さんの寺が見え  
からたちの棘の挟める一枯葉  
枝っ先吹きもがれずに櫟の葉  
滑り込むシート寒さも底打って  
寒泳者浪子の海を前にせり  
三度見て三度炎のいろ寒桜  
寒芹をこづき湧水馳せゆけり  
鮮しき切りローつ寒木瓜に  
きさらぎも半ばつるりと虚子の貌  
木の葉髪諾否ふんぎりつかぬまま

これきりと思ふくつさめ飛ばしけり  
何笑うて波間に消へし鯨の目  
翹花こたていろの昼月冲天に  
ためらひつつ氷ついたる水ならむ  
竹落葉突つ込むままに氷りけり  
鳶の鳴く水と氷の郡上かな  
延年舞黒凍みの堂鳴らしけり  
肉桂玉しゃぶる御城下凍みつぱれ  
踏台こつこもりによろけつつ立つ小晦日  
用足しつつ用思ひつく小晦日  
木の葉髪視力が落ちて堅き本  
木の葉髪妻愛読のサザエさん  
東京に出でゆく御用納の日  
霜の朝一路軌道の如くあり  
踏んづぶしをるなり甲斐の霜柱  
燃えさしの一つ一つに霜降りて  
霜げたる何の木の実か赤茶けて  
絨毯の上を温風這ひ廻り  
十夜講持味出してひとくさり  
マカダミアナツツ師走の船便にて  
目前の師走手帳に走り書き  
鰯の口この一年をしめくくる  
師走妻うしろをよぎり前よぎり  
水仙花湊手錠の形して  
湯ぼてりの顔はいびつかダツフォデイル  
アポロンのラッパ手喇叭水仙は  
水仙の袴の着付け具合かな  
スキーヤー滑空旗のやうな顔  
綿入に行方不明の本やあーい

ゆるゆると熾りて美濃の桜炭  
それそれと招ばるゝ美濃の桜炭  
ずわい蟹両腕組んで豪のもの  
ねんねこに当つて跳ねる鬼の豆  
関取の手を放れたる年の豆  
千両に祝がるる年を重ねけり  
植うるうち三浦大根は二割方  
葉先まで綺麗に蘿蔔すずしろ黄葉して  
おはじきを二つ並べし狸の目  
古障子色の日差しが花石蒔に  
参道の両側に石踏呼応して  
湧水の冬麗の日を織り込めり  
年忘れ一本杉の唄が出て  
鍋焼の鳴門の渦も煮え立ちぬ  
寝て覚めて脈をとらるゝ病ミなまこ  
病床二句  
ふつつかな海鼠物云ふ患者食  
人づてに聞けり海鼠の不料簡  
白熊の公爵白き息つけり  
蠅が来て蠅追ひ払ふ花八つ手  
はきはきと答へてをりぬ花八つ手  
めいっばい時間をつかふ花八つ手  
屯田兵絵巻冷ゆ手をさすりつつ  
ぶだう酒のやうに日差しの冷えて来し  
踊子号避寒の客を零しゆく  
避寒地に降り立ち一本目の櫻  
郡上のなあふくら雀も春駒を  
鼻の貌立て直す真暗がり  
吸ひ込まるふくろふの目のレモン色  
鼻の魔法仕掛けのこゑ出せり

蒲団のずれ直し呉れをる妻をうつつ  
福助の面テ起こせる冬はじめ  
雉子の目のやうな水輪を冬泉  
冬鷗素数の如くとびとびに  
立姿どこをおしても冬櫂  
冬桜風が間引きし花の隙  
冬ざくらひとつひとつの花の向き  
今着きしばかりの日差し冬桜  
湧水の気泡びびび寒日和  
瘤櫂すんなり櫂冬日浴ぶ  
冬日宙湧水八重にひらきけり  
湧水の川を養ふ寒日和  
今在りし冬日の何処へ十賊刈  
一列車遅れて着きぬ冬帽子  
婀あだぶりも子持高尾の冬ぼたん  
葉並びの間合又よき冬ぼたん  
口々にこれはこれはの冬ぼたん  
冬ぼたん風に正せるみどりの葉  
枝先にかけて冬芽の間詰り  
ニナリツチコーナーのポインセチアかな  
ポーナスでよろしがさうは云ふもの  
物音を立てぬ向ひ家みそさざい  
南天は本来のいろ美濃馬場ばんぼ  
餅焙り一病息災冥利かな  
餅腹に相模の海のにほふかな  
焼鳥やカワ・ネギ・ハツと声とんで  
木漏れ日の間々差すことも藪柑子  
沙羅の枝に水晶玉の雪霽  
目覚めては紙と木の家牡丹雪

目の前を大きな嘘のやうな雪  
舞へる雪津軽こぎんの花つこのやう  
直ぐなるは直ぐなるままに庭木へ雪  
白樺のいっぽん交じる雪景色  
ひとしきり雪混んでくる杉の空  
分け入りてにわか雪空美濃馬場ほんば  
雪吊の手持ち無沙汰といふべかり  
逝く年を括るに大き鍵括弧  
なまぬるき炬燵のやうな年なりき  
竜の玉識れるは竜の玉ばかり  
竜の玉なんぞ詠む季来ときたりけり  
手を入れて見れどまだまだ竜の玉  
臘梅のつりがね花に落ちゆく日  
角力好き患者綿子にくるまれて